

「憧れの」・・・
—山根 繁先生のご退職に際して—

竹 内 理

尊敬してやまない山根 繁先生が、この3月に関西大学をご退職になる。定年延長も、特別契約教授の任期も、すべて満了されてのご退職ではある。しかし、私にとっては格段の寂しさを感じる出来事なのだ。

先生とは、今から38年前、私がまだ修士課程の学生の頃にはじめてお会いして以来のお付き合いとなる。同じ大学院の先輩（といっても、先生は当時すでに帝塚山短大の助教授をされていた）ということもあり、統計ソフトを使わせて頂いたり、入手が困難な論文の複写を頂戴したりと、気軽にいろいろとお願いをしていた。そんなうっとりうしい後輩にも、とても優しい「憧れの」先輩だった。

研究でも同じだ。ここに先生の手書かれた修士論文（なぜか審査委員の捺印付きの、恐らく原本のうちの1冊）がある。当時、まだデジタルの音声分析機器がなかったので、アナログのサウンドスペクトログラフ装置（粉で肺をやられないようマスクを付けて操作する）で音声を分析し、外国語としての英語学習者のポーズや言い淀みの特徴を分析された論文で、きわめて完成度の高いものである。共通の指導教員であった河野守夫先生が、出来の悪い院生だった私に「お手本にせよ！」と貸し出してくださったのか、なぜか手許に残っている。これを文字通り読み込み、リサーチ・デザイン、文献のまとめ方、分析の仕方、議論の方法、そして論文の体裁を徹底的に学ばせて頂いた。山根先生は、私の研究者としての原点となった、付箋がいっぱい付いている思い出の論文の、「憧れの」著者でもあったのだ。

その後、先生はますますご活躍の幅を広げられ、*International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* (IRAL), *International Journal of Psycholinguistics* (IJPL), *LACUS Forum* (Linguistic Association of Canada and the US) などの国際雑誌に、日本人英語の intelligibility に関する論文を掲載されるようになられた。今でこそ当たり前のことかもしれないが、この当時、日本の研究者が、外国語教育学や音声学の分野で、世界と渡りあって論文を

出すということは珍しく、山根先生は私にとってロールモデルのような、「憧れの」研究者でもあったのだ。

その後、紆余曲折があったが、22年前からは同僚としてご一緒させて頂き、共著の論文も出版させて頂いた。さらに、私が学部長職にあった時は、副学部長として学部運営を支えて頂いたり、学会（外国語教育メディア学会：LET）でも理事として、当時会長職にあった非力な私をサポートして下さったりと、様々な場面で、一言も文句をおっしゃらず、好き勝手にする後輩を強力に支え続けてくださった。そんな頼もしい「憧れの」同僚としても、山根先生はいてくださった。

何があっても怒らず、いつもニコニコとされている人格者の先生だが、ある時、あることで、憤怒のごとく怒られたことがあった（後にも先にも1回しか見たことがない）。理不尽な要求に対して心底怒り、私をかばって、恥をかかせないよう先方に食ってかかれたのだと思う。その勢いにただただ圧倒されながらも、どんな時でも自分の味方をしてくださる存在がいた、ということに感激したのを覚えている。そんな「憧れの」友人としても、山根先生はいてくださった。

こんな沢山の「憧れの」が詰まった山根先生が、いよいよご退職になる。そう思うと、涙腺が緩まないわけがない。先生ありがとうございました。そして、これからも（無理のない範囲で）「憧れの」存在であり続けてください。